

研究ノート

フランツ・ヴェルフエル

『ヴェルディ オペラの小説』

—— 有り余る着想 Einfälle ——

猪 股 正 廣

1

かなり長い間、フランツ・ヴェルフエル（1890-1945）の作品を読んできた。最初は、Eine blaßblaue Frauenschrift『明るい青インクの女手の手紙』であり、錯綜した男女の物語の背後に古い戦前のウィーン社会が浮かび上がるような手練れの描写に舌を巻いたものだった。続いて同じく中・短編の Kleine Verhältnisse『つましい境遇』に手を伸ばした。これは比較的初期の作品だが、最初に読んだ本が後期の作品とわかったので、作品全体の瀬踏みをする意味で初期の作品から、そしてまた当時担当していた文学部大学院のドイツ語訳読授業にふさわしい長さから選んだのだった。この小説は、作家の幼年期の思い出であるかのようにブルジョア家庭の子供の視点で若い養育係の女性の姿を描き出しており、それでいてやはり背景の社会的格差にも目配りが届いている。次に読んだのは、再び後期・晩年の作品の Die wahre Geschichte vom wiederhergestellten Kreuz『作り直された十字架、真実の物語』であるが、この短編が

本来は未完の長編 *Cella oder die Überwinder* 『ツェラあるいは乗り越えた者たち』の第9章の *Die Geschichte des Kaplans vom wiederhergestellten Kreuz* 『作り直された十字架, 司祭の物語』を書き直したものであることを知って、この未完小説の全体にも当たってみたところ、短編とはまた異なり、筋立ての入り組んだ重層的な構造を垣間見せるヴェルフェルの長編の世界にも一気にのめりこみそうになった。

この作家がプラハで表現主義の代表的詩人として出発し、第1次大戦出征中に非戦・反戦の意識を固め、ウィーンの11月革命では左翼活動家として街頭で演説し、マックス・プロートやフランツ・カフカの親しい友人であったことなどはどこかで知っていた。しかし作品を読んでみて意外だったのは、小説の作風が表現主義を思わせるほどモダンというわけではなく、むしろオーソドックスな伝統的文学であるように思えたことだった。これなら、なるほど読者が国境を越えて広範囲に及ぶ人気作家になっても不思議はない。実際アメリカでは、そのほとんどの作品が翻訳されて現在もよく読まれているばかりでなく、専門家による伝記や研究書が今も刊行され続けている。ところが、ドイツと日本では、第2次大戦前後の1時期こそ彼はトーマス・マンと並び称せられる有名作家であったものの、現代ではまるで忘れ去られたようになっていく。ほぼ同世代のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロートの作品集がドイツでも日本でも大きな書店の店頭には見られるのに、フランツ・ヴェルフェルの本を求めるには古書の在庫リストかインターネットで探したほうが早いくらいである。

その理由はいくつか挙げられるだろう。ひとつには、ナチスの手を逃れてアメリカに亡命した作家の原稿の大部分が今でも彼の地にあって、テキスト・クリティークを行うにもドイツやオーストリアにだけ留まっていたとはどうにもならないという事情がある。創作に強い影響を及ぼした妻のアルマは夫の死後もアメリカにあって、作家にまつわる資料をアメリカの諸大学に寄贈したため、それらは現在カリフォルニア大学、ペンシルヴァニア大学、イエール大学など

に保管されているのである。もうひとつの理由としては、ヴェルフエル文学の大きなテーマのひとつである宗教性が多少古めかしくなり、現代人にはカトリックか、ユダヤか、あるいは両方かといった大上段に構えた問題がそれほど身近には感じられなくなっていること、さらに加えれば、これは先ほども引用したもう一人のユダヤ系人気小説家ヨーゼフ・ロートにも同じことが言えそうだが、その作品がさまざまな論議をもたらすよりも、むしろ読んで楽しむのに適していると一般に思われていることがあるかもしれない。生前埋もれた作家であったカフカが戦後にわかに現代文学として脚光を浴びたのに反比例するかのよう、かねてより人気作家であったヴェルフエルの評価が次第に沈下したのは、経済の景気変動のように上下する流行の波の結果であるとも言えようか。

とはいえ、こうした理由から、たとえ大学の研究論文で扱われることが少ないとしても、作家の名が知られているわりにはその作品があまり読まれないままであるのは残念なことである。ヴェルフエルの表現主義時代の詩は、みずみずしい情感あふれる表現が目新しかっただけに、今では時代から取り残された感があるのは否めないが、長、中、短編小説は今日読んでも新鮮なものが少なくない。ところが、邦訳には私の知る限り、以下、原題と邦訳の表題をそのまま記せば、短編が *Nicht der Mörder, der Ermordete ist schuldig. Eine Novelle* 『殺された者に罪がある』、*Der Tod des Kleinbürgers* 『小市民の死』、*Die Hotelterrasse* 『ホテルの階段』、*Das Trauerhaus* 『喪愁の家』、*Weißenstein, der Weltverbesser* 『世界改革者ヴァイセンシュタイン』の6編、中編が *Der Abituriententag. Die Geschichte einer Jugendschuld* 『青春の罪』の1編、そして9編ある長編ではおよそ半世紀前の翻訳 *Das Lied von Bernadette* 『ベルナデットの歌』（映画『聖処女』の原作）と近年の *Die vierzig Tage des Musa Dagh* 『モーゼ山の四十日』の2編があるにすぎない。戯曲についても9作品のうち、初期の2作品 *Spiegelmensch* 『鏡人』と *Bockgesang* 『山羊の歌』が

やはり半世紀以上も前に出版されただけである。

日本においてフランツ・ヴェルフェルの名は、文学というよりむしろオペラファンにとって、とりわけヴェルディ・ルネッサンスの仕掛け人として名高いのかもしれないが、人気を博した彼の最初の長編小説 Verdi. Roman der Oper『ヴェルディ オペラの小説』の邦訳もなされていない現状では、ヴェルディの書簡集やオペラが彼によってドイツ語に翻訳されたからといって格別日本で注目されないのは、やむをえないようにも思われる。したがって、今後いくつかヴェルフェルの作品を論じていく手始めとして、ここに若干入門的な文章を草して作家の生い立ちを眺め、続いてこの最初の長編小説の簡単な内容紹介に至るのも、あながち無意味ではあるまい。以下の論述に当たっては、上記のように邦訳が少ない現状からも、なるべく作家自身の文章を多く引用したいと考えている。

2

ヴェルフェルは、世紀末のプラハに生まれた。生年は1890年の9月10日である。作家の手になる Autobiographische Skizze『自伝的スケッチ』には、こう記されている。

「私の祖先はドイツ・ボヘミアのユダヤ人共同体に属していた。その子孫の系譜はドイツ語圏のプラハおよび地方都市に広くたどることができる。個々の人物については詳らかにできないけれど、一人の(姓は異なる)医者プラハの旧市街にいたこと、父方の曾祖父がナポレオン軍の主計将校としてロシア遠征に参加したことが知られている。

父の両親は19世紀半ばにプラハに移住し、ここで祖父は財をなしたものの、すぐにまたそれを失ったために、父は財産もなく借金だらけの生活をあじわった。その辛酸は若い頃に良き青春を楽しみ、恵まれた教育(バイ

エルンの寄宿学校)を受けていただけに倍もこたえた。— 数年の苦闘を経て、父は安楽の地位を得、母と結婚した。

両親の生活上の関心と野心とは主として— (今日私は感謝しつつ振り返るのだが) — その子供たちに、二人の妹と私に向けられた。人々が私を大切にしてくれ、世話をしてくれるのだという励ましの感情につつまれて私は成長することができた。」

父親ルドルフ・ヴェルフエルは長男フランツの誕生当時すでに皮革手袋製作者として成功し、プラハの中心街に立派な邸宅を所有していた。母親は製粉業を営む名望家の出身であった。カフカの父親も立身出世した人物だといわれるが、双方の住居の建物の印象には雲泥の差があったと戦前を知る人の証言がある。

「ルドルフ・ヴェルフエルはいつも、現代的なプラハの新市街に、大通りに面した清潔で申し分のない新邸宅に住んでいました。それに対して、フランツ・カフカの父親であるヘルマン・カフカは、常々かつてユダヤ人ゲットー地区であった旧市街の路地にある狭い土地に、暗く小さな賃貸住宅に住まわざるをえませんでした。…ヴェルフエルの家族は、外面的生活レベルでフランツ・カフカの家族より一段上にあっただけでなく、考え方においてもずっとリベラル寛大であり、外見上も可能な限りユダヤ色を薄めていたのです」⁽¹⁾

ヴェルフエルが9歳のときに家族は転居するが、そのいずれの邸宅にもフランツ・ヴェルフエルの養育係として後に *Barbara oder die Frömmigkeit* 『バ

(1) Peter Stephan Jungk: Franz Werfel. Eine Lebensgeschichte. Frankfurt 1987 S.48 f

ルバラあるいは敬虔』のモデルになったチェコ人女性バービ Barbi の住む一室があったはずである。彼女は日曜日になると幼いフランツを連れてカトリック教会のミサに出かけ、彼に祈りを教え、童話や逸話を話して聞かせた人である。

幼年期のヴェルフェルに早くから刻印された特性として、音楽についても見落とすことはできない。彼は後になってアルマ・マラーのピアノに合わせて、バイオリンを奏し、その出来栄えに満足しないでもないような感想を日記に書き残すこともあった。ヴェルフェル家の人たちはよく家族揃ってオペラに出かけ、特にプラハのオペラ劇場「スタジオーネ」の5月祝祭公演の観劇を欠かすことがなかった。そうした折に超一流歌手によるイタリアオペラにいかにも感動したかについては、後にヴェルフェル自らあちこちの文章に書いてもいる。また、作家のユダヤ性の問題については、幼年期から成長の過程でユダヤ人としての自覚が、いつ頃どのように生まれたか、あるいは生まれなかったかを記した Tagebucheintragungen. Erguß und Beichte 『日記記載、吐露と告解』と題する文章も残されている。次に抄訳してみる。

「私はユダヤ人である。この事実が自分に意識されたのは、かなり後になってからのことだった。というのも祝祭日になると父が6歳の私をユダヤの聖殿 Tempel に連れて行ったのであるが、どんなにそのときの記憶を呼び起こそうとしても、礼拝そのものについてはほとんど覚えていない」

「…10歳の頃であろうか、このプラハにあるユダヤの聖殿で、合唱の中に一人のソプラノの声を聞いたことがあった。至福と同時にひどく卑猥さを感じさせる声だった。それはまぎれもなく劇場の声であり、恥知らずなほど押し付けがましく、気取っていてセクシーなその声に、陶醉させられ居心地の悪い思いをさせられたため、礼拝全体がいつぱんに苦痛になってしまった」

「14歳になってとうとう無神論者、アナキストにまで出世してからは、この聖殿への道も途絶えてしまう。— ユダヤ教は私の少年時代にひとつの〈体験〉になることはなく、単なる半意識のイメージ内容に過ぎず、内部で大きな感情とはならず、むしろまったく脈絡のない衝動につながるばかりだった」

「私が成長したのは奇妙な都市だった。この都市では数世紀も前からユダヤ人であることとドイツ人であることは同じだった。ゲッターはドイツ国民の名のもとにほぼ解放されており、前世紀には事実上ドイツ文化の前哨としての役割を演じるようになっていた。多くの人には滑稽に思われようとも、そこにこそ、あの芸術および精神的創造力の変種の、あのよく知られたボヘミアのゲッターのドイツへの拡大が帰せられるのである」

「私がプラハで生活していた間、ユダヤ人としての葛藤を意識したことはない。学校の年度初めに学級担任が身上申告用紙に記入するため生徒の宗派を尋ねると、私たちは〈モーゼの教え〉と大声を上げた。その際にウィーンやベルリンで育った連中が話すような悲しい恥じらいを覚えたことはない。私の青春時代にユダヤ人であることが、人種の相違として明瞭になることは決してなかった。ただし、〈スポーツクラブ〉ではクラスが大きく二分され、ユダヤ人の数は半分だけだったのが、〈読書会のサークル〉ではユダヤ人以外の会員はたった一人だけだった」

「…ユダヤ人であることは、青春時代の私にとってもまた同種族の他の少年にとっても何の問題でもなかった。恐るべき深い体験として残ってはいない。ユダヤ会堂や宗教の授業にまつわる記憶は、奇妙で、苦痛であり、

父の家にわずかに残存していた儀式なども、どうでもよかった。そもそもユダヤ性とは、他種族の本質が私たちには秘められた危険性を予感させるゆえに、精神的社会的に同類であるユダヤ人と交際するほうが他種族と交際するよりも快適と感ずるくらいのことだった。ユダヤ社会に対するこの衝動はしかし一種の安楽と臆病であるに過ぎず、断じて国民共同体運動などと混同されるべきではない」

このようにフランツ・ヴェルフェルが少なくともその青春時代まで自己のユダヤ性をさほど意識しなかったのは、プラハという国際的な世界文化都市で裕福な家庭に育ったという環境の要素が大きかったのであろう。この時代の東方ユダヤ系ドイツ語作家には、比較的多くのユダヤ人が住む都市の出身でありながら、幼いときからドイツ語に親しみ、とりわけ学校教育を早くからドイツ語で受けているという共通点がある。さらに言えば、そのドイツ語を母語とすることを可能にしてくれた肉親、とりわけ母親との強い絆があるようにも見受けられる。

例えば小説家ヨーゼフ・ロートは、1894年に当時ガリツィアと呼ばれたロシアとポーランド国境に近い地方（現在はウクライナ）の都市、プロディ Brody に生まれたが、その地で入学した初等学校では最初からドイツ語で教育が行われていた。プロディは現在人口2万5千人ほどの小さな都市だが、ユダヤ人の学問と商業の中心地として繁栄した歴史があり、高名なユダヤ人学者も輩出している。18世紀には自由交易都市となり、人口はすでに2万人近くに達していたという。1920年代に執筆されたロートのエッセイ *Juden auf Wanderschaft* 『放浪のユダヤ人』によれば、「その小さな町」の人口1万8千人のうち1万5千人がユダヤ人だった。この地にはロートが恩師マックス・ランダウ先生から教えを受けたギムナージウムが今も残っており、街の中には不気味なシナゴークの廢墟が、また街はずれには広大なユダヤ人墓地があり、そこには大きな無

数の墓石が現在ほとんど訪れる人もなく草原に茫々と聳え立っている。父親は物品の仲買などをする商人であったが、商用旅行中に精神に異常をきたした後、世間体をはばかって行方不明者あるいは自殺者として扱われ、一人息子は母方の実家で育てられることになった。秘蔵っ子に最高の教育を受けさせるために全力を尽くした母親の影響は成長期において特に大きかったと思われる。

また彼のほぼ一世代後の詩人パウル・ツェランは1920年に当時ルーマニア北部（現在はウクライナ）のプロヴィナ地方にあった人口10万人以上の都市チェルノヴィッツ Czernowitz に生まれ、やはり最初はドイツ語で教育する幼稚園と初等学校に通った。1849年にプロヴィナはガリツィアから分離し、ハプスブルク家の直轄領になり、その中心都市であるチェルノヴィッツにはウクライナ人、ルーマニア人、ユダヤ人、ドイツ人、ポーランド人、ハンガリー人など多くの民族が住んでいたが、20世紀初頭から年々ユダヤ人の比率が高くなり、1910年にはユダヤ人の人口がおよそ40パーセントを占めるまでになっていた。ツェランはシオニストであった父親の方針にしたがい、入学間もなくヘブライ語で授業をする初等学校に転校して3年間通ったが、彼の母親（絶唱、Schwarze Flocken「黒い雪片」で哀悼される人）は、ドイツ文化およびドイツ古典文学の熱心な信奉者であり、彼女によって家庭では努めて標準ドイツ語が使われていたという。やがてチェルノヴィッツ市内のギムナージウムで熱心にフランス語を学ぶようになり、その卒業後最初のうちは両親の希望にしたがいフランスのトゥール大学で医学を専攻した。しかし第2次世界大戦によって留学が不可能になってからはチェルノヴィッツ大学のフランス文学科に籍を置いた。彼はドイツ語・ルーマニア語・フランス語・英語・ロシア語を操ることができたが、文字通り母から習い覚えたドイツ語が終生にわたって母語であった。両親が収容所で相次いで亡くなった後、戦後まもなく発表された詩が一部ルーマニア語で書かれているのを除いて、パリに定住した後発表された詩集も原作はドイツ語であり続けたのである。戦前のチェルノヴィッツの街は、書店

の数がパン屋の数より多いと言われ、文芸の香りに満ちた美しい都市であった。その書店や図書館にとりわけドイツ語の書籍が多かったことは想像に難くない。

しかし、こうした東方の都市とは違った規模と親西欧的性格がヴェルフェルの住む大都市プラハにはあったようである。1900当時のプラハには約40万の人口があり、そのうち約3万5千人はドイツ語を使っており、チェコ語およびドイツ語を使用言語とするユダヤ人の数はおよそ2万5千人（国勢調査によるとチェコ語を申告したのは14,145人、ドイツ語を申告したのは11,346人）だったという。ヴェルフェルは先に引用した文章『日記記載、吐露と告解』の中で、さらに次のようにも書いている。

「私たちが東方のポーランドやロシアのユダヤ人を見たりすると、近親種族の一体的感情に見舞われるなどと主張するのは、嘘である。

これらの人たちは私たちの目に異様で不気味に映り、話す言葉も私たちのものとは違っていて、信仰も別世界のものだった」

ヴェルフェルは6歳になって、カトリックのピアリスト修道会学校（詩人リルケもここに学んだ）に入学するが、ここには当時裕福な家庭の子弟が集まり、大部分の生徒はユダヤ系だった。

「チェコのカトリック修道者がユダヤ人の生徒にドイツ語で授業することを誰もおかしいと思わなかった。それは当時のプラハの典型的な状況だった」⁽²⁾

(2) Lore B. Foltin: Franz Werfel. Stuttgart 1972 S.18

10歳になると修道院のすぐ近くにあったドイツ・ギムナージウムに入学し、第3学年を繰り返したあげく、14歳でシュテファン・ギムナージウムに転校して、奇しくもそこで就学前からの幼な友達であり、ついには生涯の友人ともなったヴィリー・ハースと同窓になる。少年時代の二人はせっせと文学書を持ち寄って読み競い、学校以外でも毎日のように会っていた。後にドイツの有名な新聞の文芸欄「世界文芸」の創設者となるこの人物をヴェルフエルが生涯の友人と呼ぶのは、まったく誇張ではない。彼の習作詩に耳を傾け、感動し、代わりに清書して新聞に投稿して初めて作品が活字になったのも、作家となった後に代表作といわれる長編『モーゼ山の四十日』の執筆およびその大幅な改稿に際して資料探しや助言に尽力を惜しまなかったのも、また亡命地アメリカで死の直前に脱稿された空想・未来小説 Stern der Ungeborenen『生まれぬ者たちの星』の中で主人公 F.W. の旅に道連れ B.H. として登場するのも、このヴィリー・ハースだからである。

19歳までの間に、ヴェルフエルはハースを含む友人たちと連れ立って、新ドイツ劇場でマックス・ラインハルト演出のベルリン・ドイツ劇場客演を観たり、常連だったカフェで議論したり、夜の酒場やナイトクラブや娼館などにも通うようになった。この思春期を回顧した作品としては、短編『喪愁の家』と中編『青春の罪』がある。当時プラハで一番古い高級娼館のサロンにヴェルフエルが姿を現すとすぐに老ピアニストがイタリアオペラの伴奏を弾き始めたと言われ、ヴェルフエルはどんなオペラでもそのさわりを美しいテノールで歌えることで有名だった。6最年長のマックス・プロートと知り合い、当時トロイカと呼ばれていた3人組マックス・プロート：フランツ・カフカ：フェリクス・ヴェルチュに詩が評価されるようになったのも、18歳のこの頃のことである⁽³⁾。

(3) この3人の中で比較的知名度の低いフェリクス・ヴェルチュについては、その伝記と作品を紹介する著書が昨年出版された Carsten Schmidt: Kafkas fast unbekannter Freund. Leben und Werk von Felix Weltsch. Würzburg 2010

カフカは、1924年6月にウィーンで亡くなるが、その年にヴェルフエルの最初の長編小説『ヴェルディ オペラの小説』が出版されており、死の病床にあって最後にカフカが読んだ本も快癒の願いとともに著者から献呈されたこの長編小説であった。

さて、論述をこの調子で続けていくと、作家が長編小説を執筆し始めた30歳代半ばまでにさらに10ページ以上もこれから書き連ねなければならなくなる。その上、作家自身の文章の引用を多くするという目論見も困難になる。そこで、この間の出来事を Rowohlts Monographien 卷末の年譜⁽⁴⁾に多少手を入れて簡単に記し、次いでアルマと出会った30歳代前後の時期に断続的な日記が残されており長編『ヴェルディ オペラの小説』執筆当時の様子もそこにかがえるので、これも続けて抄訳する。

年譜

- 1890 フランツ・ヴィクトル・ヴェルフエル、9月10日プラハに生まれる。
- 1896 プラハの私立ピアリスト修道院学校。
- 1904 プラハのドイツ・ギムナージウム。
- 1909 (19歳)ギムナージウム卒業試験。— ヴィリー・ハース、エアンスト・ドイチュ、マックス・プロート、フランツ・カフカと交友。— 大学の講義を時々聞く。— 初めて詩が散発的に活字になる。
- 1910 父の意向にしたがい、ハンブルクの交易運送会社で実習。
- 1911 プラハで砲兵連隊に1年間の兵役。— 詩集 *Der Weltfreund* 『世界の友』。
- 1912 秋からライプツィヒのクルト・ヴォルフ出版社で編集に従事。
- 1913 ライナー・マリア・リルケと出会う。— カール・クラウスとの争い

(4) Norbert Abels: Franz Werfel. Mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg 1990 S.150

の始まり。

- 1914 プラハ。当面兵役を免れる。詩集 Einander 『相互』。
- 1915 兵役に就き、南ティロルのボーツェンでロープウェイから降りそこなって両脚に重傷を負う。詩集 Wir sind 『ぼくらがいる』。— 入院先の看護婦ゲルトルート・シュピルクと交際。
- 1916 東ガリツィアの前線に出征。— 4月22日 Die Troerinnen des Euripides 『エウリピデスのトロヤの女たち』 ベルリンのレッシング劇場で初演。
- 1917 晩夏、ウィーンの戦時報道本部に配属。— オットー・グロスと交友。— アルマ・マラー・グロピウスと初めて出会う（アルマは、作曲家マラーと死別後、建築家グロピウスと再婚していた）。— 随筆 Die christliche Sendung 『キリスト教的使命』
- 1918 スイスで平和主義に基づく講演。7月9日 Der Besuche aus dem Elysium 『樂園からの訪れ』 ベルリン・ドイツ劇場で初演。— 8月2日アルマがヴェルフエルの長男を出産。— ウィーン11月革命に参加。
- 1919 この年からナチスによるオーストリア併合に至るまでの19年間、主たる住居はウィーンであるが、時にウィーンの約100キロ南西にあるブライテンシュタインやイタリアのヴェネツィアやサンタ・マルゲリータ・リグーレに長期滞在する。— 長男の死。— 詩集 Der Gerichtstag 『審判の日』
- 1920 Nicht der Mörder, der Ermordete ist schuldig. Eine Novelle 『殺された者に罪がある』, Die schwarze Messe, Roman 『黒ミサ』。
- 1921 10月15日 Spiegelmensch 『鏡人』 ライプツィッヒの旧劇場で初演。
- 1922 5月10日 Bockgesang 『山羊の歌』 ウィーンのライムント劇場で初演。
- 1923 1月6日 Der Schweiger 『沈黙の人』 プラハの新ドイツ劇場で初演。— ヴェルディ小説の執筆。— 詩集 Beschwörungen 『呪術』

1924 Verdi. Roman der Oper 『ヴェルディ オペラの小説』 — 6月3日フ
ランツ・カフカの死。

日記

1918年8月2日

朝8時40分に療養所に電話する。彼女の夫、グロピウス氏に電話がつながる。
動揺した低い声で彼はこう語った。「とても大変な夜でした。子供は生きて
います。アルマはどうかこうにか無事です。あと数日待ってみないと」…

8月3日

朝グロピウス氏に電話する。経過は比較的良好だが、危機は去っていない。
相変わらず出血の心配がある。…

8月4日

朝9時に療養所から彼女の使いが来て、私にこの手紙を渡してくれた。—
それで、私はうれしくなり、たくさん音楽をとという気になって、ヴェルディ
を歌った。子供の危機はすっかり忘れた。…

かわいそうな虚弱児、震えながら、居場所から引き剥がされるのが早すぎ
た！

生きるだろうか。

そして生き続けるのが幸せなのだろうか（虚弱、病気、7ヶ月…）

私の子だろうか。

彼女の手紙はそうだと知っている！…

8月5日

彼女のところに行って、子供を見た。ちゃんと生育しており、顔は目鼻立ち

がはっきりしていて、これは私の種族だとはっきりわかった。…

8月7日

彼女から手紙は来ない。

緊張が緩んだ。

日々の危機。

でも、『饗宴』を読んだ。

そして午後には、ルナンの『ユダヤ人の歴史』。すばらしい！ 特にヘブライ聖書についての章。…

8月11日

今朝、郵便受けて彼女の手紙が破れているのを見つけた。—彼女の夫が開封して、すべてを知ったのではないかと疑う。

根拠なし。

8月26日

彼は昨日すべてを知った。

アルマと私が朝電話しているとき、duで話しているのを耳にしたのだった。部屋に入ってきて、彼女が私にduと言ったのを聞いた。—そこで、彼は尋ねた、—彼女は黙った—それで全部わかってしまった。

彼は午後私のところに来たが、私は眠っていて、ノックを聞き逃した。そこでカードをおいていった。こう書いてある。「私は自分にできる限りの力をふるって、あなたを愛するに至りました。—アルマをいたわってあげて下さい。事故が起きるかもしれません。興奮が私を—私たちから(!)子供が奪われでもすると!」

この高潔さわまりない言葉を読んで、私は我を失い、完全な虚脱状態になり、

文字通り魂消えた。こうなるだろうとは前からずっと予感があったにもかかわらず。ひたすら彼女をめぐる不安と恐怖が大きかったのだ。—そして、この高貴な人間、彼をめぐる苦しみ！ 1日中、そして1晩中—私の愛がこんな苦痛を与えるに値するのか、その権利があるのかという疑い。…

1920年2月3日

ウィーンの芸術社会が私を嫌っているのは、私にはわかりきったことだ。私もウィーンの流儀は耐えられない。はかない自惚れと心理的サディズムのこの不快な混交。

私が身をもってユダヤ人であることを肯定しているせいで、ウィーンのユダヤ人たちの私に対する近親憎悪。

昨夜ゾラの『^{かね}金』を読了。私には、ゾラの循環的な象徴性をもっとも尊い。その点で彼は他の誰よりも偉大である。彼には心理学はどうしてもよく、人間内部の事象は二の次であり、常に全体性、形而上の分析に関心がある。その点で彼は、ストリンドベリとメーテルリンクを500人並べたよりも超自然的である。

2月8日

…名声とは、何か。

何処にも生えないパラドクスな^{なたね}菜種から作ったきつい蒸留酒。

そいつを味わって楽しもうとすると、

逆に飲まれて、血流を煽るけれど、

喉から流れ込んでしまうと、

かえって^{しらふ}素面になるような。

6月の構想

(ここには、1927年発表の短編集 Geheimnis eines Menschen 『人間の秘密』所収の Die Entfremdung 『疎外』の粗筋が記されている — 筆者)

1921年5月

ゴットフリート・ケラーの『ロミオとユリア』を読んだ。19世紀にこれほど神聖、風刺的、超心理的なことが書かれたとは信じられないほどである。この作品は二人の葛藤と融合によって根源的な力を象徴的に描写していると私には感じられた。しかしあまりに崇高、前進的、優美、そしてリアリズムに溶け込んでいるために、私たちからも作家からも作品の鍵が失われてしまい、その意味が見出せないままに、えもいわれぬ幸福感の混じった悲哀の思い出ばかりが私たちの心に響いてくる。

1923年6月半ば(ブライテンシュタインに)戻った。この寒さ、嵐、花咲く野原、でも上に光がない。5週間ヴェネツィアにいたときの明るく、晴れた日々。心の休息、ほとんど疑心もなく。最後の14日間集中したのでヴェルディ小説が生き生きしてきた。— 今までに購入したのは、(イタリア語)統一運動リソルジメントについて。創造力がとても漲る感じ。考えや空想が自ずと湧いてきて、流れ、進った……着想 Einfälle の全部を捕え、意識することはできなかった、つまり着想の最小部分しか保持できなかった。ここでは：V.の本について疑い、疑い、疑い。— この作品を前にして強く躊躇^{ためら}い、ある種の羞恥さえ覚える！ 絶えずペンを放り投げ、また絶えず取り上げる。— ミテミヨウ！！ ミエルダロウ！

始まり：23年6月14日

第1章に対する不安が一番大きく、落ち着かない……全体が私には真実ではなく、主観的で、V.に対する侮辱であるように思える。階下で、『シチリア

島の夕べの祈り』を弾く。しばしばそれでヴェルディの偉大さを信じる気持ちが衰える、着想 Einfall が少なすぎ、ありふれた作為ばかりと。

9月末に最初の草稿が出来上がった。今日11月7日に『V. オペラの小説』の印刷原稿を終えた。

日に夜を次ぐ途方もない仕事。いいものになったのかどうか?? 最初の感情は部分的に残った。疑いはいつもの通り! いまさら失敗を云々する気持ちも時間もない。5ヶ月のプライテンシュタイン滞在後、明日ウィーンのアルマのところに行く。彼女が私の胸のうちにいるのをひしと感ずる。— 私は都市に飢えている。

この仕事で視力がだいぶ衰えた。

これがたぶん1923年最後の記入になるだろう! さらば、プライテンシュタイン! 再び、あるいはむしろ初めてというべきか、1冊の本のために私の多くの活力と時間が奪われた。

私はこの小説に誠意を尽くした。でも、まだ足りない、まだまだ足りない!!!!

1924年

4月1日にシオルナイ Zsolnay 出版社からヴェルディ小説が出た。終わりの部分には相当手を入れたが、この作品に対する(校正での)判断に気が滅入った。30代の連中。ヤーコプ・ヴァッサーマンの判断は厳しいけれど共感できた。

本が出版された後、最初の読者たちからは感激した賛同の声を聞いている。

3

日記にも示されているように、ヴェルフエルは芸術作品の着想にこだわったが、自らの作品においてもその着想の多い作家であったと、ユダヤ系文学史家ハンス・マイヤーが彼をヴェルディやトーマス・マンやムージルと比較して語っている。ハンス・マイヤーもまたナチスから逃れてスイスに亡命し、戦後東ドイツに移住してライプツィヒ大学で教壇に立ち、さらに60年代西ドイツに移ってハノーファー大学教授を定年まで勤め、その後テュービンゲンに定住して当地の大学の名誉教授になっていたのを、ヴェルフエルの画期的な伝記を書いたユンクが訪ねインタヴューしたのである⁽⁵⁾。

「しかしヴェルディ自身にとって、着想というものは現実世界において常に構成上の一要素にすぎず、そこから作品の全体が構想されるのですが、ヴェルフエルの場合は、自分の着想の扱い方がわからず、いわば生原料のまま着想を使ってしまう。〈作家の仕事は、アイデアから何かをすることである〉とトーマス・マンは言っていますが、まさにこの〈作る〉ということがヴェルフエルにはどうもしっくりせず、それが必ずしもうまくいくとは限りませんでした。トーマス・マンとか、あるいはローベルト・ムージルが別の仕方を持っていたような知性、理性的レヴェルに彼は当然ながら及ばないのです。ヴェルフエルには無限の着想があつて、ありすぎるほどでした。もしムージルにあれだけの着想があつたら、『特性のない男』は完成していたでしょう。往々にしてヴェルフエルに欠けるのは、まさに、この設計して構成する力でした。…

ヴェルフエルにとっては、情動性、ロマン主義的な着想、叙情詩的本質、

(5) Peter Stephan Jungk S.172f.

言語の力が決定的なものでした。彼は自分の言葉をもっていました！ 書くのが下手で耐えられないようなシュテファン・ツヴァイクと正反対です。ツヴァイクは誇張します。ありもしない着想を誇張する。それに対して、ヴェルフエルには着想が有り余っている。でも多くの場合それが、ものにならない。彼は天性からして、ムージルなどよりずっと才能がありました。それでいてムージルは彼よりずっと興味を引く作家なのです。…」

これはヴェルフエルの作品の中で長編よりも短編をよしとする立場からの発言であるが、短編に限らず作品全体に対してもトーマス・マンやローベルト・ムージルに比べてシュテファン・ツヴァイクやフランツ・ヴェルフエルの評価がきわめて低いのは、こうしたドイツ文学界の主知主義的傾向からの見方も与っているのかもしれない。しかし着想の多い作品とは読んでいて飽きず、面白い本ということでもあり、ヴェルフエルの最初の長編小説『ヴェルディ オペラの小説』が発刊当時爆発的に売れ、よく読まれた理由のひとつも多分そこにあった。筆者のようにオペラあるいは音楽に対してかなり疎い読者であっても、この作品は場所をヴェネツィアに、時を1883年前後に限定した一種の時代小説として十分に楽しめるのである。

この着想の豊富さに関して少し具体的に例を挙げると、この作品にはヴェルディとヴァーグナーをめぐる主筋の他に、少なくとも5つの副筋がある。それらは小説中、いずれもヴェルディの知人、友人にかかわり、当然のことながら何らかの意味で音楽に関係する者たちのエピソードとして現れている。こうした副筋の扱いは、彼が愛読したイタリア・ロマン主義の作家、アレッサンドロ・マンゾーニの歴史小説『婚約者』I Promessi Sposiにも負っているのかもしれない。先に引用した日記中、1924年ヴェルディ小説の出版を告げた後に、このマンゾーニの作品を2度読んでいること、最初に読んだのは1921年のナポリにおいてだったこと、そして叙事詩と長編小説の間には根本的な違いがあると記

しているが、これは長編小説の筋立ての緊密な連関と構成を意識した記述であるだろう。ヴェルディ小説の中でも、主人公の親友であるヴェネツィア議員の次男レンツォの名を上記作品の主人公に因んで命名されたとわざわざ作中に書いているほどに、このイタリア文学の名作に対する作家の思いは浅からぬものがあつたと言える。オペラを通して始まったイタリアの音楽、言語、文学、風土、人々への傾倒は、ヴェネツィアにあつたアルマの別荘ヤリグーレ海に面したサンタ・マルゲリータ・リグーレのお気に入りのホテルに長期滞在することでいよいよ強まり、このヴェルディ小説の後も、作家の愛着がもっとも濃いDie Geschwister von Neapel『ナポリの兄弟姉妹』を生み出していく。しかし、あまり先走らずに、先の本題に戻ろう。

ヴェルディ小説の5つの副筋とは、まず百歳老人といわれるグリッティ公爵のオペラ狂いとその蒐集品のことであり、次に議員の長男イターロと医師の妻ピアンカとの恋愛であり、さらにフェニーチェ劇場の切符切りダーリオと彼の障害のある美声の息子の物語、そして売れないまま零落したオペラ作曲家兼評論家であるサッサローリのエピソード、最後に悲劇の前衛作曲家フィッシュベックと彼の貧しい家族の物語である。このうち3番目と4番目の二つは比較的短い挿話であり、実際にヴェルディが音楽家のための養老施設を作ったのを髣髴とさせるような、音楽に携わる者に対する彼のきわめて人間的な行為を表現している点で最後のフィッシュベックの物語に連なっていくと考えることも可能である。そう理解するなら、副筋は大きく見て3つあるといってもいい。これらの人々がヴェルディという主人公とどういつながりを持ち、彼をめぐる大きな物語の流れに副流がうまく組み込まれていくかどうかが、おそらく叙事詩ではなく長編小説を書いた作家の苦心だったのであろう。イターロとピアンカの不倫と出産をめぐる経過には、日記に見られるようなヴェルフェルと当時まだグロピウスの妻であつたアルマとの緊迫した劇的な日々が投影されると思われ、ハンス・マイヤーが言う「生原料のまま着想を使ってしまう」と

は、こういうことを指すのかもしれない。たしかにそこには生煮えの通俗小説のような気味がないではないが、芸術家小説の硬さを和らげ、ヴェルディのオペラのごとく読者をはらはらさせながら、その興味を小説の最後まで引きつけておくためには有効な物語であると私は評価したい。文学と見るか、小説として楽しむかは、結局のところ読者の問題であろう。トーマス・マンの短編『ヴェニスに死す』だけが、この街を舞台にした現代の古典ドイツ文学というのでは寂しすぎる。

この長編の主筋あるいはライトモチーフとなっているのは、2人の巨匠の出会いとすれ違いである。ヴァーグナーが死の直前に数週間ヴェネツィアに滞在していたのは史実であるが、その時期おりしもヴェルディがその地を訪れていたという設定で物語は進行する。ヴェルディは長年の懸案であるオペラ『リア王』を完成させるべく、名を隠してひそかにホテルに滞在しており、熱狂的なファンに取り囲まれたヴァーグナーがフェニーチェ劇場や街中を歩く姿を何度か目撃するが、そのつど話しかける機会を逸するというか、その勇気を持ってない。しかしついに思い立って自らヴァーグナーのホテルを訪ね、門番に案内を乞う。そのときは、折しもその日突然の心臓発作でヴァーグナーは亡くなっていた。ヴェルディはその直後、若い作曲家フィッシュベックを病床に訪ね、自分とはわからぬように（作曲家の妻には見抜かれてしまうが）彼と家族に救いの手を差し伸べ、ホテルを引き払って帰郷する。『リア王』の草稿はヴェネツィアで破棄されたが、名作『オテロ』を完成するのはその数年後であった。

以上が作家の着想に基づく簡単な梗概である。最後にこの小説の章分けと序文を訳出しておく。

序文

第1章 フェニーチェ劇場のコンサート

第2章 百歳老人と蒐集品

- 第3章 トランクの中のリア王
- 第4章 障害者の歌
- 第5章 皇帝派には法王派と、法王派には皇帝派と言われ
- 第6章 マティーアス・フィッシュベック
- 第7章 その瞬間
- 第8章 カーニヴァルの火
- 第9章 運命の力
- 第10章 旋律の流出
- 後奏曲

序文

この本のプランはすでに12年前から構想されていた。

何度も執筆が繰り延べられてきた。

芸術上の懸念があって、なんども麻痺してしまったのである。歴史的物語一般に通ずる懸念。この物語には文学的の舞台と歴史的の舞台、あるいは虚構の世界と調査可能な現実の世界という二つの舞台があり、そこからして直ちに失敗の音色を響かせかねない。

この失敗の音色は、物語の進行する時代が近いほど、強くなる。多くの人が体験したばかりの昨日のことに對してさえ、それ書き写そうとすれば深遠かつ繊細な感覚が必要になり、著者は大きな責任を負うことになる。

しかし、この失敗の音色を克服するのがもっとも困難なのは、いわゆる芸術家小説の場合である。内面に向かう人たち、高名な人物、創造のプロセスを描こうとすれば、偽り、誇張、決まり文句に陥りやすい。こうした過ちが少なからず繰り返されてきた。

しかし、純粹な美の追及に危険が伴うことを決して恐れてはならない。それ

が危険ではないことを証明するには、行為あるのみである。

そればかりか、今までの長い躊躇いにはもうひとつ深い理由がある。それはこの物語の主人公自身に起因するものである。

世間に知られることに恐怖を感じ、新聞をわれらの時代の鞭と呼び、遣された書簡を出版すれば不正の烙印を押し、(ロッシーニの言によれば)人を訪問するのを嫌ったために、パリであらゆるチャンスを台無しにした彼、人里離れて農場暮らしをした男一、そういう人物が小説の主人公に仕立て上げられるのに抵抗しないはずがあるか？

愛、感激、彼の音楽に対する曇りなき情熱、離れがたいこと、その作品、人生、人間性への傾倒、結局それらすべてが打ち勝ってしまったのである。もちろん相手も無条件に折れようとはしなかった。

昔の本の中で読者の寛容が請われた如く、この作品の執筆中は厳格な主人公に対する寛容が請われざるを得なかった。主人公はいささかなりとも真実が損なわれることに耐えようとはしなかったからである。しかるに、ひとつの生の厳密きわまる伝記的材料、あらゆる事実と矛盾、解釈と分析などは、まだそれだけでは真実ではない。

私たちはそれらの中から真実を獲得、そう、初めて生み出さなければならないのである、純粋な、固有な、神秘的な真実、ある一人の人間の伝説を。

マエストロ自身がある手紙の中で芸術の秘密を次のすばらしい文で表現し、この真実への信仰を告白している。

「真実を模倣することは良いことかもしれませんが、しかし真実を作ることはもっと良いこと、ずっと良いことです……」

ブライテンシュタイン、1923年夏 F. W.

テキスト

Werfel, Franz: Gesammelte Werke in Einzelbänden, hrsg. v. Knut Beck. Frankfurt

Werfel, Franz: Zwischen Oben und Unten. Prosa.Tagebücher. Aphorismen. Literarische Nachträge,
aus dem Nachlaß hrsg. v. Adolf D. Klarmann. München/Wien 1980.

主要参考文献

Abels, Norbert: Franz Werfel. Mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg 1990.

Eggers, Frank Joachim: „Ich bin ein Katholik mit jüdischen Gehirn“- Modernitätskritik und Religion
bei Joseph Roth und Franz Werfel. Frankfurt 1996

Foltin, Lore B.: Franz Werfel. Stuttgart 1972.

Jungk, Peter Stephan: Franz Werfel. Eine Lebensgeschichte. Frankfurt 1987.

Paulsen, Wolfgang: Franz Werfel. Sein Weg in den Roman. Tübingen/Basel 1995.

von Puttkammer, Annemarie: Franz Werfel. Wort und Antwort. Würzburg 1952.